



私はマジシャンに恋をした。

たまたま訪れた香港で出会った、韓国の若いマジシャン。

憂いをたたえた黒く深い瞳から目をそらすことができず、しなやかな指先に髪をなでられた時、私は迷わずすべてを彼にゆだねてしまった。

彼もまた、一目見て気に入ったと言い、私を抱きしめて離さなかった。

そして、周りのスタッフに苦笑されるのもいとわず、そのまま彼の国へ連れて行ってくれた。

以来、公演には私も必ず付き添い、彼のマジックショーを盛り上げる助手を務めた。

「さあ、ご覧下さい。美しい彼女が僕のかげ声ひとつで変身します！」

彼が観客に宣言する。

その甘く艶のある声は、舞台上で緊張する私の鼓動をさらに加速させた。

「ハナ（いち）、 トゥール（にい）、 セーッ（さん）！」

赤いビロードのカバーをすりと翻すと、箱の中から十数羽の鳩が勢いよく飛び立ち、観客は大

きな歓声を上げる。続いて空っぽの空間に感嘆のため息を漏らす。

彼にとって、とても満ち足りた瞬間。

それは私にとっても至福の時だった。

そして、それが永遠に続くことを信じて疑わなかった私。

ある日、私は激しい頭痛のために、眠れない一夜を明かした。

朝になると彼がやってきて、夕べは乱暴に扱って悪かった、と謝ってきた。

前夜、彼はプロモーターと酒の席で激しく口論し、帰宅してからも怒りが治まらず、私や周りのスタッフ達に八つ当たりしたのだった。

会食について行けなかった私には何があったか分からず、激昂した彼をなんとかなだめようとおろおろしていた。

偶然、彼が振り上げた手が私の顔に当たった。

勢い余って床に倒れ込んだ私は、さらに頭を強打してしまった。

その痛みは朝になっても引かなかったけれど、そんなことはおくびにも出さず、私は精一杯、笑顔で彼を励ました。

大丈夫よ、心配いらないわ

そんな顔しないで

ほら、いつもの笑顔を見せて

意気消沈した彼は無言で私を抱きしめてくれたが、しばらくして諦めた表情でため息をつくと、

私の髪をひとなでして部屋を出て行った。

その時の、彼のせつない瞳が忘れられない。

彼は私に顔向けできないと思ったのか、それ以来私を避けるようになり、舞台に立たせることもしなくなった。

私がいくら気にしていないと言っても、彼はすまなそうな表情で一瞥するだけで、声すらかけてくれなくなった。

私はずっと同じ場所で彼を待っていた。

待つことしかできなかった。

彼と出逢った日のこと。

抱きしめられた時のぬくもり。

やさしく私を呼ぶ声。

思い出を繰り返す日々は、あまりの辛さに涙が止まらなかった。

もう一度髪をなでて欲しい。

舞台上で私を誇らしげに見て欲しい。

そう願うことだけが、私に許された自由だった。

あれからどれほどの月日経ったのか、数えることもやめて涙も枯れた頃、やっと彼がやってきた。

あの甘い声で私を呼んでくれた時、胸がはりさけそうで、でも幸せだった。

「ごめんな。でも、もう置いておけないんだ」

彼は私を傷つけたことを思い出すたび、辛かったと話してくれた。

とぎれとぎれに話す彼はとても悲しそうで痛々しく、そんな顔をさせている原因が私なのだと思うと、胸がつぶれてしまいそうに苦しかった。

私と彼の関係はもう元通りにならない。

舞台にも上がれない。

何故こんなことになってしまったのだろう。

何がいけなかったのだろう。

彼を責めたい気持ちもあったけれど、最後の意地を張り、私は彼の耳元でささやいた。

もういいわ

来てくれただけでうれしい

今までありがとう

「ねえ、このダンボール箱って何？ ゴミ？」

ストレートの髪をまとめ、Tシャツにジーンズの若い女が箱を持ち上げると、中で何かがカチャカチャと音を立てた。

「割れ物？」

トラックに引越し荷物を積み込んでいた男が振り返った。

「あ、うん・・・　・・・もういらぬ道具とかだから」

女は男が少し口ごもったことに気がついたが、特に聞き返しもせず、ゴミ置き場に行き、その箱を置いた。

見ると、ガムテープがはがれかけて隙間が開いていた。

「何がはいってるのかしら？」

単純な好奇心から隙間を広げ、中をのぞいてみた。

大きな茶色い目玉が、ぎょろりところらを見た！

「ひっ!？」

女は思わずのけぞり、尻もちをついた。

おそるおそる手を伸ばし、意を決してガムテープをはがす。

ふたの部分が片方開いた。

すると、急に表情が明るくなり、笑い出した。

「なあんだ、びっくりした！」

隙間から見えたのは、逆さまになったセルロイド人形の頭だった。

落としてしまったのか、左眼の上あたりからぱっくりと割れている。

人形だと分かっても何となく気味が悪い気がして、女は足先で箱を押しやると、それをゴミの山の一部にした。

青空が見える

久しぶりだわ

さっき、彼の声が聞こえた気がしたけど、やっぱり夢かしら

ええ、きっと夢ね

彼の声がどんなだったか、もう曖昧になってしまったもの

でも、いいの

彼は確かに、私を愛してくれていたから

箱の上に、さらに別の箱が置かれた。

青空はほんの刹那、見えただけだった。

-- 終劇 --